

わゆる就業ということではなく、地域での活動や社会貢献を通じて社会参加する実践についての報告がありました。その報告の中では、当事者の声として、「自分たちが活躍しているのを世の人に見てもらいたい」という思いが見られているという紹介があり、さまざまな地域活動や社会活動に参加する中で、地域の方々との接点から広がりが生まれているとありました。チクラネットでは、福祉事業所が地域活動や社会活動に取り組むことに対して制度の枠組みに入れ、給付費の報酬として評価の必要性を提案していると報告がありました。

3番目のシンポジスト、(株)PCRホールディングスの吉田 周生 氏からは、「夢の実現を目指して」というテーマでの実践報告がありました。これまでの経過としては、知的障がいのあるご自身の息子さんの将来を考え、就労継続A型事業所を立ち上げたことがスタートです。支援学校卒業後の就労の場を作ったことをきっかけに、以降、グループホーム6か所、就労継続A型から一般就労への展開の支援、就労継続B型事業所2か所、介護保険デイサービス事業所の展開を進めてこられました。その中で、グループホーム支援を中心にした生活支援の実践の話が多彩にありました。ご自身の様々な体験のなかで利用者支援について心がけていることとして、自分の未来計画会議として、成りたい自分の実現を大切に考える支援を実践されているという報告が強く印象に残りました。

シンポジストの報告が一通りあった後、コーディネーターの箕輪氏から「何事も意欲がないと続かないのでは？」という質問が投げかけられました。それぞれのシンポジストからは、「様々な体験で持った満足感が意欲につながるのでは?」、「楽しい体験ということは、単に面白いということではなく、成長していくプロセスが重要。自己実現。」「目標を達成する努力」などが確認されました。また、「みんなのために、活動のために、仕事のために頑張る(自分のためにだけではしんどいことも)」、「役割を果たしたり、頼りにされることを通じて、自分の存在を確認している。」ということを実感できるような見せ方も重要ではないかという指摘もありました。

次に箕輪氏から、「利用者への伝え方で工夫していることは」という質問があり、長谷川氏からは「就職の際にはマッチングが必要だが、発する言葉が何を示しているのか正確に聞き取ることが重要で、本人のやりたい気持ちや思いをくみ取るようにしている。」とありました。岩上氏からは、「理由を聞く前に、それ

っていいですねって言うようにしている。肯定すると思っていることを言いやすい。相手を尊重して対話することを心がけている。」とありました。吉田氏からは、「経験値がいろいろな意味で役に立つ。いろいろな経験を踏まえて判断していくのでは。良いことも悪いことも経験している方がいい。リアルな体験がしっかり伝わる。」とありました。また、吉田氏からは、事業の持続可能性の担保のために、「従業員が安心して働くことができるように」ということを心がけており、そのことが良いサービスの提供のために重要であると訴えられていました。

### 【全国大会 第2分科会】



最後のまとめでは、コーディネーターの箕輪氏から、①先に限界をつけない、固定概念を持たない、②リスクマネジメントだけでなく、どうしたらできるかというポジティブな発想、③経験、発想(気づき・思い付き)、④誰のため、何のために。という4つの視点が支援者に求められているとありました。

その後、シンポジストからのまとめとして、吉田氏からは「幸せはだれかの不幸の上に成り立つものではない」、岩上氏からは「ご本人がどう生きていくのかということを支える」、長谷川氏から「主体的に生きてほしい。そのための教育。伸びしろを伸ばす仕組みが必要」とあり、シンポジウムが締めくくられました。

### 第3分科会「暮らす」 ～暮らしを支える仕組み～

メープル 管理者 角森 佐岐子

午前の部では、日本相談支援専門員協会顧問の福岡寿氏が、『暮らしを支える仕組み ～相談支援は地域生活のかなめ～』というテーマで講演されました。

福岡氏のお話は大変面白く会場内には笑いが絶えませんでした。入所施設や相談支援専門員としての実践から繰り出される言葉は、親や支援者には少々耳が痛い内容でした。